特定非営利活動法人
サヘルの森　機関誌

サヘル SAHEL

No.96　2015.6

2015 年 5 月 今年もマリへ出かけてきます

代表　坂場 光雄

5 月 1 日、パソコンでマリ共和国のバマコの気温を見ると、最高が 43℃、最低が 23℃と出ました。天気は快晴。この季節は暑い。

5 月 22 日から 2 か月間のマリ訪問の予定を組みました。最初は飛行機の予約。これまではタイのバンコクを経て、アジスアベバ、バマコに向かっていましたが、今年の 4 月からエチオピア航空の成田発着が実現し、エチオピアのアジスアベバへ直行便が飛ぶようになりました。アジスアベバで乗り換えると、7 時間ほどでバマコに行けます。乗り換えが一回減り、運賃も安くなりました。ただ、一回目のフライトが 16 時間と大変長いのが気がかりです。ビザは在日マリ大使館に申請して、パスポートに記入されました。

活動地は、首都のバマコ周辺、近隣の地域を予定しています。雨季が始まるこの季節は、苗木配布と植林が中心です。2014 年の活動では、村人へ直接、いろいろな種類の苗木の配布を行いました。それがどうなるかを確認したいと思い、その時に苗木を受け取った村人の写真を撮りました。プリントした写真を準備していて、どのようにしたら、うまく配布した苗木の生育がわかるかを考えています。大きな村では人探しが難しいと考え、小さな村を対象とする予定です。ほかには何度も訪れていて、よく知っているあたりの村です。

また、菜園などの柵の補強となるように、村人と一緒に菜園の周辺に苗木の植栽を進めています。樹種はてアカシアセネガルとユーカリで行っています。生育状態を見る定点観測は、すでに何か所かで行っていますが、地点を増やして、その場所の写真で生育の経過が観測出来ればと考えています。

ホテルムレンの敷地の一部で進めている見本林の樹種を増やしていくこと、 学校林造成等の協力、荒廃地植林の生育チェックなど、課題はたくさんありますが、健康に気を付けて活動します。

マリの国内の治安状況は不安定な部分があり、5 月に入ってモプチ・セグー方面で集団の略奪行為の発生で混乱し、難民も発生しているとの報道があります。現地スタッフや住民等との情報交換で安全状況を確認しながら、行動したいと思います。

薫風香るよい季節、皆様のご健康とご活躍を祈念いたします。今後とも、ご支援、ご協力をお願いいたします。

＜スタッフ派遣スケジュール＞

	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月
坂場光雄	←―	――	―→			
榎本　肇				←―	――	―→

サヘル地域の里山再生にどう取り組んで行くか
（その方向性のスケッチ）

小島 通雅

はじめに　サヘル地域の里山、その危機的状況については種々なものに書かれているので、ここでは極く抽象的だが次のような指摘をしておくにとどめる。サヘル地域でやられている三つの活動（農・牧・林）は密接に関連した一つの生業のようなものであり、これが展開する農地と里山も、長い期間で見れば相互に転換する一つのもの（農地－里山）と見れなくもない。養分を使う農地利用の期間と養分をチャージする樹林状態を行き来している。

最初の一手は？　再生・維持を考えるに当たって、村の人たちが薪その他を伐り出したり、家畜を放牧したり、種々に使っている里山は、村の共有地なのか個人の所有地なのか？どちらが多いのか？我が国のように登記所に行って公図を調べれば分かる、といった状況にはない。今迄苗を配りながら多くの村々を廻って見聞きした中から推察するに、現在の樹林地（比較的平坦な里山について言えば）の大部分は一旦は畑として個人の使用の色が付いた土地と考えるのが妥当な様に思う。村によって違いはあるかもしれないが、個人の色がついたものを元に戻すのは難しい。又、村として使える広い樹林地に戻せる、戻せたとしても、かなり劣化・荒廃しているところだ。これを村の共同作業で再生へと方向づけていくのはなかなか難しいように思う。これは今迄に何回か、村で植えるという共同作業をやってみての実感。短期的に効果が見える小さなものならまだしも、成果が見える迄少なくとも十年はかかり、将来の利益配分も定かではないものに全員の意気がそろったり、気合が入る訳けがない。じゃあ、どうする？サヘルの森のやり方は「調査して」ではない。最初の一手は「実施する」事、その中で種々聞いたり反応を見たりしながら次の手を考え、打っていくのである。

　多くの村で数多くの村人と知り合った。木を植えるなら誰とやれば上手くいくだろうという事はわかっている。しかしそうした誰か個人が自分の所有地に里山を造っても、或いはそうした人が増えても、それでは里山の機能の一部しか満たさない。里山が村全体で機能するには、何か村としての取り決め・申し合わせのようなものが必要な様に思う。更に隣接する村々とのそれも必要だろう。しかし、まず次のように始める。村の中から数人を選んで、他村で木の苗も作ったりしている様な、農業を多角的に上手くやっている篤農家－地域苗畑主として既に親交のある人達－の所へ見学に連れて行き、自分たちのこれから進む方向を考えさせる様仕向ける。村に戻って少し間を置いてから、彼等を訪ね、彼らの農地や樹林地（休閑地）を見せてもらい、これからどうしたいか？話し合い、もし彼等に意欲があれば、希望すれば彼ら所有の樹林地、荒廃地に一緒に木を植え始める。これから始めてみよう。

切り株の根元、ここからだ！　里山－劣化した樹林地－に太い中高木は殆ど立っていない。部分的には低木すらなくなって裸地化している。再生ですぐ思い浮かぶのはそうした木の無い所へ苗木を補植する事だろう。しかし、林全体から見るとそうした裸地化した所は、必ずしも新植に適した所ではない様に思われる。確かに太陽光に恵まれているという点からは条件は良い。しかし地表下の土壌条件では違う。周辺の植生が残っている部分は低木が多いが、その中には大木の切株が必ずと言って良い程ある筈だ。枯れて腐ったものもあるし、まだ生きていて萌芽し、若い幹を元気に伸ばしているものもある。そうした切り株、根株の周囲の地下には伐られるまで巨木を支えていた太い根があることを考えてみる。そうした根がそこに形成された、地上の大木を育てたという事は、土壌が物理構造的にも根の発育に適切であり、水分や養分もそれ相応にあったという事だ。又、今ある太い根、細い根それを養分吸収面で補完している菌根、菌糸網、その周囲に形成されている微生物から地中の小動物迄を含めた生態系を想像してみる。新しく植える木を考えると、その根にとって、裸地化して堅く締まった部分とは違って、地下に豊富な潜在的有機物のある最高の環境のような気がする。そこで裸地となっている部分でなく低木が残っている切り株・根株の周囲から始める。

ここに巣植えの概念を広げた次のような考え方で臨む。ちなみに巣植えとは、植林する時、列状等間隔に植えるのではなく、比較的近くに数本まとめて植え、少し離して数本まとめて、といったグループ植えのことを言う。この巣植えの考え方を時間的に引き伸ばしたような考え方のもとに植えてみよう。すなわち、根株の近くで少し大きくなった苗、小さな苗、新しく播いた種を一緒に育てるというのである。置いたポット苗を育てるには「水やり」をしなければならないが、その水やりが或期間続けば周辺にある既存の低木・芽生え（早くに植えてある巣植え仲間？）が一緒に育っていく。

こうして切株・根株の周囲の木々を活性化し、広げていくが、裸地となっている部分は其処に穴を掘って置くとか、表面の土を少し削って窪ませる（土は植えたり水をやったりしている根株周辺へ盛り上げる）。くぼんでくれば水が溜まり、草が生えて上手くいけば白アリが巣を作る。自然にしておいてもその周囲に新しい植生が。もし急ぐなら樹木の種を播いたり苗を植えてみる。こんな風にして里山の再生ができればと考えているが。

ウシやヤギ達の剪定で　誰だって木を植えれば、上手く活着し、早く大きくなって欲しい。そのために条件の良さそうな所を選び、必要なら水やり、家畜の食害を受けない様に保護柵を作ったりする。しかし、今やろうとしている所は、そう条件の良いところではないし、それに、家畜のウロウロ出来る所でなければならない。そんな所ですくすく順調に育てるなんて望むべくもない。現在ある里山は前に記した様に、畑－休閑地のサイクルを通じて、一旦坊主になって、二次的に出来た林だ。その過程では、雨が降らず枯れかかったり、野火に焼かれた事もあり、家畜に食われ続けながら成長してきたものと考えてよかろう。そうして育ったから種々な機能を合わせ持った里山として最近まで力強く存続してこられたと言っても良いかもしれない。

今迄、極く少数の例外を除いて、大体は植付け直後の一本毎の簡単な保護柵、これで植えて来た。最近は枯枝をかぶせて置く、食害を受けにくい樹種をまぜる等、より簡便な方法を試している。それらを前節で記した様な、現場でポット苗を育てる段階から適用してみるという事だ。ウシやヤギが葉先を食べて剪定してくれた、それで地上部の蒸散量が減って、根の負担も軽くなり枯れずに済むんだと考えよう。

もう一つは野火の話。何もない裸地に木の苗を植えるとその周囲に雑草が段々増えてくる。そこへ野火が来れば、小さい苗は一緒に焼けて枯れてしまう。対策として野火の季節がやって来る前に草を刈り払っておくとか、火に焙られてもすぐ回復する様な樹種に変えるといった事が今迄の野火との取り組み方、野火のとらえ方であった。しかし、中高木から低木、もっと小さい芽生え、この様なもの迄あるステージでの里山整備・再生を考えると、野火の意味が大分変わってくるというか、野火の新しい役割が見えてくるような気がする。野火の強さにもよるが、低木・中高木といった木の大きさだけでなく、樹種による木の性質－常緑か落葉か－の違い、樹形－普通の直立形かつる性か－の違いで受けるダメージの大きさに差がある。又、林地の手入れ整備状況で違いが出てくる。もう少し言えば、野火が来ると単に再生が中断されるとか遅れるということではなく、再生されていく里山に質的差違が出てくるということだろう。まだよくわからないが、昨年強い野火が試験地を襲ったが、それを見ての感想からだ。

野火への対処は二つのレベルで考えるのが現実的だろう。個人レベルでは野火に強い、回復の早い樹種の導入、野火をブロックする常緑性のつる（ザバ等）を処々に混ぜる。木の根元に枯枝や枯草を置くなら土をかぶせる等、小まめな手入れを。もう一つは、防火帯（常時伐開して燃えるものを置かない、逆に燃えない樹種を密に植えて置く）を設けるといった集落レベル、集落間レベルの検討事項だ。

おわりに　村の里山再生・維持には、個人や家族で進められる事と、皆で一緒にやらねば意味のない、種々な取り決めや守り事の二つが絡む。ここでは、前者を中心に、どうスタートするか、どんなやり方で進んだら良いだろうか、スケッチしてみた。これで上手くいけば、いくつかの成功例を積み重ねた上で、最終的に後者の利用、維持についての取り決め、守り事を村で話し合う事になる。その際、個人が再生・整備したものは、その個人だけが利用できるという単純なものではなく、里山の数多い種々な利用毎に、年間での利用可能時期等も考慮した取り決め、守り事を。そうすれば、少しは実効あるものになるのでは、と考える。

トドマツ林と下川町

フプの森から－北海道下川町の森林資源有効活用

亀山 範子

こんにちは。以前、サヘルの事務局でお世話になっていた亀山です。大学時代から農畜産業について勉強していた私が、初めて「森」や「木」に興味を持ったのが当時のサヘルの会でした。その私が、流れ流れて今は北海道で森林に関わる仕事をしています。その仕事というのは、森林に手入れの際に不要となるトドマツの枝葉を利用して精油（エッセンシャルオイル）を製造し販売する、というものです。

林産業衰退からの復活をかけて

北海道、下川町。冬はマイナス 30 度、夏はプラス 30 度にもなる、町の面積の 90%以上が森林という道北の小さな町です。基幹産業は林産業で、人口は 3,500 人ほど。最盛期には人口 15,000 人以上にもなりましたが、外材の流入、鉱山の衰退などで一気に過疎化が進みました。その後、町の復興をかけて「森林」をキーワードに様々な取り組みが行われ、そのひとつがこの精油事業です。

トドマツ精油事業のはじまり

北海道の造林地で植えられる主な樹種には、トドマツ、カラマツ、アカエゾマツなどがありますが、そのなかでトドマツは圧倒的に精油含量が多く、戦時中は松根油として戦闘機の燃料にしようとしていたくらいです。そこで、森の手入れの際にこれまで捨て置かれてきたトドマツの枝葉を利用して精油を作ろう、と立ち上がったのが下川町森林組合でした。

まず、トドマツ伐採などの現場があるとその枝葉を集めに森に向かいます。そこで残されている枝葉を集め、工場に運び釜にかけ水蒸気蒸留をします。すると精油と、芳香蒸留水という水溶性の液が採れます。原料の重さの 0.50～1%ほどしか精油は採れません。それほど貴重なものです。それは、柑橘にも似たさわやかさと、やさしいやわらかさのある森の香り。精油はアロマテラピーなどで使うエッセンシャルオイルや、ルームスプレーとして、芳香蒸留水は化粧水などにして販売します。そして、蒸留後の残った葉っぱも無駄にはしません。陰干しして枕にすると、ほんのり森の香りがします。

釜入れ前の原料枝葉

森林資源を使い尽くす

下川町森林組合の工場では、木材にならない小径木（細かったり曲がったりしている木）も有効利用しています。皮を剥いて公園の杭などの円柱材にし、その削りかすの“おが粉”は土壌改良材などの「粉炭」になります。燃料用の炭を焼いてその時に出る木酢液や煙は円柱材の防腐処理に使うなど、循環しすべて使い尽くすゼロエミッションに取り組んでいます。また、町自体はウッドチップでバイオマスボイラー稼働させるなど「バイオマス産業都市」として木質資源のエネルギー利用などにも取り組んでいます。

森林からのメッセージ

トドマツ精油事業は、2000 年の森林組合での事業化後、NPO 法人に委譲され、今は株式会社フプの森として独立しています。私もその会社のメンバーです。「フプ」とはアイヌ語で「トドマツ」の意味。アイヌの人々は森の木々や草花、動物たちの生命を敬い、感謝して森と共存してきました。その精神にあやかりたいとこの名をつけさせてもらいました。現在この事業で使用しているトドマツ枝葉の量は全体のほんのわずかで、未利用資源有効利用に貢献できているかはわかりませんが、この事業を続ける事で北海道の森林や林業などについてのメッセージを、精油の香りにのせていろいろな人に届けられたらと思っています。

会員番号物語（その7）

３番は幽霊会員

河田 隆弘（会員番号３番）

まえおき

久しぶりに久保さんからの電話をいただき、懐かしく、お話しを伺いました。今となっては会費を払うだけの幽霊会員の典型ですので昔話しになりますが、気ままに書いてみたいと思います。

きっかけは

会員番号は３番、1987年２月の設立総会の折、会員になりました。当時は農学系大学に通う学生でしたが、サークルから参加していた学校連合的な自主運営のゼミで、「サヘルの会」設立者の一人である高橋さん（会員番号31番）の講演を聴きました。

季節は秋で、来年早々に会を発足しますよ、という紹介が講演の最後にありました。日本国際ボランティアセンター（JVC）のソマリアでの活動などを紹介する内容でしたが、特に現地の方々の様子を沢山伺うことができ、とても新鮮でした。

小学生の頃にエチオピア革命時の飢餓報道に触れ心を痛めた世代でもあり、当時の新聞などでも支援物資が現地に届かない状況などが報道される中、お金や物の援助に疑問を抱き始めた頃でした。また、大学卒業後の進路を考える上で、国際協力の仕事に関心がありました。

一方で、当時は国内の有機農法農家へ援農に、また大規模経営農家へアルバイトにと忙しく、国内の農業にも関心を寄せていましたが、結果的には、現在まで、国内で農業関係の仕事を続けています。でも当時は、会から専門家としてマリへ派遣される日が来ることを心に留めていました。

なぜ、今日までマリを訪れることが無かったのか。実は、生来、語学にセンスが無かったことも一因ではないかと…。この頃、会の有志でお茶の水のJVC本部に語学学校「アテネ・フランセ」の先生を招きフランス語を教わっていましたが、周囲がどんどん向上していくのに、一向に上達しない自分に焦りを感じていたものです。結局、その年の６月に派遣された調査団を見送って、その後の数か月間、事務局長代行として東京都足立区にあった会の仮事務所（高橋さんのアパート）に下宿して、創設直後の会の活動を支えることになりました。

設立の頃

学生から調査団にも参加した加藤（伸）くん（会員番号103番）や、赤塚さん（会員番号22番）、設立者の一人の佐久間さん（会員番号32番）などと、会誌「サヘル」の創刊を手掛けましたが、最初は手書きとワープロ原稿を切り貼りした素朴なものでした。

創刊号の「図書案内」に紹介した本の出版社に記事掲載の承諾をもらいに行って、割引での書籍提供の申し出を頂いた思い出もあります。その頃は、新聞社、テレビ局にも会の活動を紹介して、突然の電話での対応にも関わらず、記事や番組にして頂きました。また、事務局長代行時には、財団からの初めての大口寄付の申し出も受けましたが、この折などに米倉さん（会員番号10番）に事務的な面でも随分助けて頂きました。

連日、電話での応対をするなか個人からの寄付の申し出も沢山頂きましたが、特に、年金で生活しているという初老の女性から「少額ですが」と頂いた電話のことが忘れられません。

その後は、代表もやられた宮尾さん（会員番号193番）も合流して、代々木上原の公民館でリソグラフをお借りして年４回程度の会誌発送を行いましたが、回を追うごとに紙面も洗練されてきました。

設立の年は、会の活動も非常に盛んで、4月には志村さん（会員番号74番）を中心に企画された連続シンポジウムも始まり、その頃から大沼さん（会員番号36番）や小島先生（会員番号５番）、杉野さん（会員番号166番）など強力な技術者も加わりました。

毎週木曜日に新宿駅前のコーヒー店「西武」で開催されたミーティングは、毎回、伝説となるような熱気と、出会いの歓喜に包まれていました。

名前を全て載せられませんが、今に至るまで会を支えてきた方の多くが、このミーティングを通じて参加されています。

その後から現在まで

その後、就職を機に少し会とは縁遠くなりましたが、国内研修のお手伝いや、活動の節目には報告書の編集などに関わる機会がありました。毎年、何かしらの縁を持ち続けたいと思い、募金活動などイベントの運営にも参加していました。

転機となったのは神奈川県が招集した「NGO かながわ国際協力会議」に県支部事務局長の肩書で参加したことでした。「横浜・鎌倉グリーンウォーク」など NGO 間で連携した活動に親しんでいたこともあり、気軽に臨んだものが、実は知事の諮問機関的なフォーマルな会議であることが判り、これは、大変苦労しました。知事は私の職場の長でもあるため、意図について周囲からも大分詮索されました。結局、地元の DV 被害者のシェルターを運営している団体など異分野の方々とも親しく活動させて頂き、良い思い出ともなり、県補助による NPO 活動支援の道を付けるなど結果も残せたと思いますが、会との認識のずれ（会では支部活動の充実を考え、実際に会議で行っている内容には関心が持たれませんでした）もあり、任期 2 年の半分を経過したところで、役員を辞することにしました。

このような状況下で生まれた神奈川支部の活動ですが、現在まで久保さん（会員番号 94 番）に支えて頂いています。その後は、会の執行部の方々との交流もなく、実質的な活動からは、縁遠くなっています。今は、送られてくる会誌や報告書を楽しみに、皆さんの活躍を祈念する毎日です。

…会員番号は整理のための数字ではない。会員番号にはひとつづつのドラマと思いがある。今は欠番の人の思いも積み込んで、会は前に進んでいきます。（サヘルの森）

国内活動（1～5月）

＜報告会・講演会＞
・3/21　現地活動報告会（小島）
・5/19　海外林業技術情報交換会で講演（榎本）

＜定例活動＞
・1/17　日本橋七福神、日本橋
・2/21　多摩丘陵、薬師池公園
・4/18　増上寺、芝公園
・5/16　深大寺城址、植物多様性センター

■牛乳パック回収

資源回収委託式に出席しました。

2 月 4 日に横浜市立浦島丘中学校の資源回収委託式に出席してきました。1988 年から始まって今年で 27 年目になります。

今年はアルミ缶と牛乳パックの回収金 17,824 円を寄付していただきました。

昨年、浦島丘中学校は全国パック連（全国牛乳パックの再利用を考える連絡会）から取材を受け、今度、牛乳パックリサイクル事例集に紹介されるそうです。代表の方が以前にサヘルの森を取材していたことを覚えていて、問合せがありました。パック回収を通じて、いろいろな方々と繋がっているのだと改めて感じました。（榎本肇）

浦島丘中学校の生徒さんたちと

◆多田勲さんを偲んで◆　監事役などを長年務めて下さった多田勲さんが 12 月 23 日に逝去されました。まだサヘルの会だった頃、石川～富山まで企業への御礼と報告会の引率役を引き受けていただいたこと、趣味の「ご当地カルタ」収集のお手伝いをして、那覇で発見したカルタを送って大変喜ばれたことなど思い出します。御冥福をお祈りします。（高津佳史）

■アフリカンフェスタ in ズーラシアに出展

4月11日（土）～12日（日）に横浜市旭区のよこはま動物園ズーラシアで「アフリカンフェスタ in ズーラシア」が開催されました。

昨年は相模大野の中央公園で行った際にこのイベントに参加しています。今年は4/22（水）に動物園のアフリカ・サバンナゾーンがオープンになるため、それに合わせてズーラシアでの開催となりました。

治安が悪化する前にマリを旅行したというご夫婦、パーニュを仕入れてスカートやパンツを作ってネット販売している女性、アフリカ布で作った鍋つかみを気に入って戻ってきて2つ目を買ってくれた女性、アフリカで植林をしていると知って戻ってきて募金をしてくれた子供さんなど。

偶然の出会いですが、これまでとは違った人達に知ってもらえたという当初の目的は少しは達成できたのかなと思います。普段あまりなじみのない家族連れにサヘルの森の活動の紹介ができました。（榎本肇）

■みどりとふれあうフェスティバル2015に出展

5月9日（土）～5月10日（日）に、日比谷公園で毎年恒例の「みどりとふれあうフェスティバル2015」が開催されました。

サヘルブース今年の目玉は、「マリの泥染め体験」でした。このワークショップのために1ヶ月前から、綿のコースターをマリから持ち帰った「ガラマ」と「ペグー」で草木染めをしました。この草木染めをした生地に鉄分を含んだ泥で絵を描くと、泥を置いた部分が黒くなるのです。参加費はコースター1枚200円です。参加者の中には私たちの「見本」よりもはるかに上手に幾何学模様を描かれた方もいました。

展示していたバオバブの実や種にも多くの方が関心を示し、100円で販売していたバオバブの種も飛ぶように売れました。

「昨年、サヘルのブースで種をもらい、発芽しましたよ！」と報告に来てくださった方がいて嬉しかったです。老若男女問わず多くの方と活動のお話をして「頑張ってくださいね」と応援して頂きました。忙しかったのですが、充実した2日間でした。ボランティアでお手伝いに来てくださった会員の皆さまにも感謝申し上げます。ありがとうございました。（原梓）

■サパ=西アフリカの人達を支援する会から絵本100冊を寄贈

ギニア、ギニアビサウで活動をしてきたNGO・サパが今年2月末をもって解散となりました。そこで活動に役立ててほしいと、サパが企画した絵本『森はどこにあるの？』（作：バン チハル）100冊を寄贈いただきました。

絵本は、アフリカの男の子とチンパンジーの子供が森の動物たちの助けを借りて木を育てていくという話しです。絵もかわいいですし、子供さんにアフリカを感じてもらうにはもってこいの本です。御興味がある方は事務局まで。（榎本肇）

■アフリカンスクエアーからサパ写真集10冊を寄贈

アフリカ商品を扱うアフリカンスクエアーからサパの写真集10冊を寄贈していただきました。サパから譲り受けた写真集をアフリカで活動するNGOに活用して欲しいとことでしたので、こちらからお願いして寄贈していただきました。

早速、これまでに関係の深い小・中学校へ寄贈させていただきました。西アフリカの生活感が漂う写真集を生徒のみなさんに活用していただければと思います。（榎本肇）

定例活動（7～12 月）

7 月以降の定例活動とサヘルキャンプの予定です。坂場代表とぶらぶら散歩をご希望の方は、事前に事務局までご連絡下さい。

●7 月 25 日（土）10:30 集合
武蔵野の湧水群と台地の遺跡
南大沢湧水群、六仙公園、小山台遺跡
西武池袋線・東久留米駅改札
●9 月 19 日（土）10:30 集合
江戸の宿場町と海辺の緑地
品川歴史館、区民公園、品川寺
JR 京浜東北線・大森駅北口改札
●10 月 17 日（土）10:30 集合
都内唯一の都電とその沿線の遊園地
都電荒川線、荒川遊園、鬼子母神
JR 山手線・高田馬場駅早稲田口改札
●11 月 21 日（土）10:30 集合
メタセコイアの紅葉と水郷景観
水元公園
JR 常磐線・金町駅改札
●12 月 19 日（土）10:30 集合
江戸川区の動物園と庭園のある公園
行船公園・動物園、タワーホール船堀
地下鉄東西線・西葛西駅北口改札

☆サヘルキャンプ☆
●8 月 22 日（土）　日帰り
集合：相鉄線瀬谷駅改札10:00
（瀬谷作業場10:30）
場所：神奈川県横浜市瀬谷区中屋敷作業場
持ち物：長袖シャツ・前掛け・タオル、
虫除け剤、飲用水
費用：実費精算（主に食事代1,000円程度）

夏の一日、会員交流、自然観察、技術研修等を目的として料理と工作を楽しみます。
マリ式に、簡易かまどでピーナッツシチューを作ります。お米は、簡易飯盒で炊きます。簡易飯盒って？？は当日のお楽しみ。
便利な暮らしから少しだけ離れて、モノのない暮らし・工夫を考えてみましょう。

・サヘルキャンプに参加希望の方は、準備の都合上、8月20日までにサヘルの森事務局までご連絡下さい。

ホームページリニューアル

新しいホームページでは、現在活動しているバマコ近郊やファナ地域などの活動を紹介しています。現場経験者にご協力頂き、トンブクトゥやモプチなどでの活動も振り返ることができます。是非一度ご覧下さい。
スタッフブログも随時更新していますので、併せてご覧いただけると嬉しいです。
さらに、5 月から Facebook のページも開設いたしました。Facebook をやっている方は検索の所で「サヘルの森」と入力すると見ることができます。いいね！をよろしくお願いします。　（原梓）

七夕募金のお願い

夏季恒例の七夕募金へのご協力をお願いいたします。同封の振り込み用紙をご利用下さい。
短冊にはサヘル地域の安定化への願いを込めたいと思います。

会費納入にご協力ください

NPO 法人『サヘルの森』はサハラ砂漠の南縁サヘル地域において植林活動を行う市民団体です。会員には機関誌『サヘル』が届きます。お申し込みは、郵便振替で下記の口座に会費をお振込みください。

・一般会員　年 5,000 円
・維持会員　年 20,000 円

特定非営利活動法人　サヘルの森
住所：〒194-0013 東京都町田市原町田 1-2-3
アーベイン平本 403　㈱エコプラン内
TEL：042-721-1601（留守電対応）
FAX：042-721-1704
郵便振替口座：00170-6-115054

HP：http://www.jca.apc.org/sahel-no-mori/
BLOG：http://sahelnomor.exblog.jp/
E-mail：sahel-no-mori@jca.apc.org
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
機関誌『サヘル』No.96　2015 年 6 月 29 日発行
発行人：坂場光雄　／編集：高津佳史
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊